

四季の雨・雲を押し出す光

川崎隆章

確保したバラバラの座席で観覧することになりました。あの大劇場の一階が見事にスキマなく埋まっている。この会を楽しく埋めにしている方がどれほど多いか、本当によくなりました。

われわれがいる。
きっと、あまりに親しみがあるからでしょうか。誰もが

も増えてゆく世界。良さも苦しみも増えてゆるほど、良さも苦しみも増えてゆく世界。タンゴの名手、ピアソラの歌にも「タンゴよ、お前は私を苦しめ、喜びを与える」という概念の一端がありました。その芸その世界に出会ったから、掴んだ喜び、それを知つてしまつたために受け続ける血と汗の苦しみ。芸術がより近く、親しくなる喜怒哀樂。時に憎くさえある喜怒哀樂。時に憎くさえある「芸」。時に愛おしくさえある「芸」。ああ、そこまで愛さなければ、ああ、そこまで憎まなければ、得られるものも得られない」と反省もしました。

「四季の雨」は「そんなことを後々考へさせてくれる、余韻の長い、深い作品として受け止めました」といふと何やら深刻な作品のように思われるかもしれません。しかし千寿文先生の説明は、明るく愉しい雰囲気に包まれていました。さばさばとした男仕草と、たおやかな女仕草の分け。文楽人形のようのに明確な喜怒哀樂の表情や首の動きなど、三階席を射抜くような鮮

に辛い目、面倒な思いをして
もその「良いところ」に目が
向くのでしよう。
千寿先生の「四季の雨」
はそんな事を思わせてくれた
した。
雨。それがないと生きていゆ
けない。見た目には美しいこ
とさえある。たとえば小さな屋根
の下で雨音をききながら雨根
くりと二人で杯を差し向かえ
う風情の良さ。相合傘で柳の樹
のような雨の中そろそろと歩い
てゆく喜び。深まつた秋の寒空
に降る驟雨の中を駆け抜け
る時の「生きている」という感
感。時に憎く見える雨。時に
愛おしく見える雨。これ
は、何かに似ているなあと思
いました。

烈な眼光。どれも緊張感があつて、かつ嬉しい。しつとり・どつしりとした演目の合

なあ、自分ももつと磨きよう
があるぞ」とこの文を書い
ていて、改めて思いなま
もう、日々、しんどいこと
の連続です。どんどん多忙を
買つているようにさえ思えま
す。でも、いつ一つの雨には、
やはり替えがたい良さ「出
会つてみる」がねえ。わからな
い良さがある。面倒「辛抱を超
える喜びもある。そこにつし
かり目線をあわせて精進して
ゆけば、大舞台も夢物ではない
だけなあ」と、夢物的な希望。
さえ抱いてしまいました。
とはいえ、傘は荷物になる
し、道はビシャビシャ、愚痴
が布咲師匠「こんな愚痴を吹
き飛ばしはじれるような娘だ
谷」の「チクショウ」みたい

から、こぼれてくる「光」を感じました。千寿先生は、いつも、嫌艮く眼をクリリとさせて上品に笑つてらしやいます。本当に心の底から明るい方なんだなあ、機嫌の佳い方なんだから、と思ふのです。しかし、いろいろ伺ううちに、芯がお強い方には違ひないとも思ひました。家事を持かれ、芸を磨かされ、おつきあいを欠かさず、どれにものもきつと進んで苦勞なさつたのではしかしながら、「雨」のようや、大変だ大変だとは思ひながら、それぞれの苦勞の良さ、面白さのほうをもつと強く感じていらつしやる。その向きのないししまして。

旅。途中雲の中にぼつかり、頭を出している富士山を眺めながら、初めで行く山中温泉などはどんなところだろうと不安と期待が浮かんでいます。小松から山中までの道のりは、若葉が美しく、思わず「ゆけばむり」という企画で、温泉街を中心にある山中座で、同い年の熟女(?)四人、西松・布咏・己紗朋明・己紗紀咏、そして司会の加藤さんで、舞台をつとめます。昼の部の芸者衆の三味の音を楽しんで、また、だんだん不安な気持ちになってしまふやつと会場が空いて、舞台の上でのりハーサル。三人で唄ったり踊りたりするので、出番が色々変わるのでそなたびに動搖。夜七時半、師匠の「夕暮れ」で幕がやつとあって、加藤さんの軽妙な司会と、師匠の美しい声を舞台裏で聞きながら、

江戸の香りとゆけむり
—西松布咏社中江山中温泉
五月三日、連休で賑わつて
いる羽田を出発し、石川県の
小松空港までの一時間の空の
旅でした。ごちそうまでした。

江戸の香りとゆけむり

卷之三

今は、聴衆の側の感想でしたのが伝わりました。ここ数ヶ月、今までにな
りました。何年も前におさらいした曲がまたなものになつたこと。唄う時持たず、た
だ無心に唄うなどと雑なところなど、得るもののは沢山ありました。
皆様もぜひ一度経験してみて下さいネ。

「山中しぐれ」で一旦幕が下りました。約三十分舞台の上で正座してのではうようにして樂屋にたどりつけました。第三部は、師匠が違う着物に着替えてじっくり聴かせます。そして新内一滝の白糸^{シロヌイ}で盛大な拍手とともに幕が下りました。山中座は随所に山中塗りがあしらわれた立派な会場で歌舞伎座を小さくしたような雰囲気のある中の江戸の香りのたつぶりする小唄を唄うことができたのは、大きな幸せでした。お世話になつた司会の加藤さんはじめ中出館長、山中塗り師の佐竹さんにも感謝、感謝しました。

やつと気分が落ち着いてきました。
第二部では、「夢の柳橋」「今

編集後記